

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十七年四月一日発行（毎月一回一日発行）
第十一卷第十二号（通巻第一三二号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第132号

4. 2005

茶筥振り

品川鈴子

顕微鏡には淡雪の六角華

凍ゆるみ池にひしめくチンダル華

雪解溪綾取橋の揺れやまざ

雪吊りの先は茶筥の芯振り



劍豪が育ちし村の雪間草

出番待ち咳治おきまらぬサンバ姫

雛なほも飾る暇なき誕生日

税申告・校正いまだ誕生日

つちくもり父に担がれまどろむ児

釜揚げに猫舌なだめ花曇り



玉 鈴

大阪 藤田 京子

冬枯の浮島に猫うずくまる
風花や降臨の峯仰ぎ見る
高千穂の峯寒風が頬を刺す
初凧の錦江湾に舟一艘
霧島の稜線染める初茜

兵庫 史 あかり

甕の水飲みに降り立つ初雀
歌留多よむ坊主めくりが濟みて後
木偶に息合はせ大夫の初笑
小正月阪急電車はあずき色
初稽古一日遅れの筋肉痛

愛媛 星加 克己

友住める町の名告ぐる遠夜火事
こめかみを血脈のうつ寒夜かな
老二人丘に登れば冬すみれ
山眠る背なに西方浄土光
並び立つ本家と元祖ひねり餅

吟

香川 細川 知子

息かけてバイク磨くも年用意
軒下に残る波あと注連飾る
家長の座どつかり守り鏡餅
愛称で呼び合ふ夫婦福寿草
初湯槽骨の髓までしみとほる

兵庫 細野 恵久

春の川音符のごとく泡流れ
龍井茶滝れて清明節の午後
先に犬行くにまかせて木の芽山
面映ゆきまで白日の躑躅躑
死燕の肩に漂ふ水の色

香川 松井 洋子

碧眼の達筆なるや翁の忌
冬日向雑木も石も貌を持ち
夜の静寂に身じろぎもせず落葉舟
冬日向体温持ちし招き猫
気配遺し自動扉閉づ冬日向

愛媛 松本 恒子

伐採のやまびこ尖る冬の山
潮騒の音受けとめて野水仙
名目は何の彼んのと甲羅酒
大旦忘れ上手を笑ひ合ふ
言祝ぎに樟脳匂ふ明けの春

愛媛 三浦 如水

雪山に船首真向かひ入港す
旧要塞砲座に残る焚火跡
雪原の静脈となり川流る
碇泊のタンカー楯に浮寝鳥
大音声上げて先達火を渡る

愛媛 三浦 澄江

熱爛やつつがなく生き八十年
亡くなりし人の偉大さ冬銀河
軍歌とは哀^{かな}しきものよ片時雨
城壁の銃眼に射す寒^{いり}没^ひ日
仮設住宅わが家恋しと虎落笛

兵庫 三枝 邦光

賞罰なし転職一回札納
洋^{うみ}に向く小部屋の宿り初茜
屠蘇の膳幼二人を膝に寄す
風邪臥の煎じ薬を信じをり
ことごとくSTE^シW^チの煮込み阪神忌

兵庫 水野 範子

福寿草停年の無き厨事
失明の師に持ち寄りの喰積を
寒の水食道滑る速さかな
注連飾り赤米散らす群雀
梅一輪箴に添へて普茶料理

香川 三橋 早苗

柚子ぷかり体もぷかり風呂に浮く
一年の無沙汰を詫びる年賀状
長編の冒頭忘れ去年今年
身の程を知らず受験子出願す
文庫本手元に置きて寝正月

薬草歳時記

(一三二) ザゼンソウ(座禅草)

菅原由紀

座禅草の五つ三つに水奏で

上条 勝

長野県野辺山のキャンプ場の下見に出かけた時、日陰の湿地帯で突然見かけた。まるでこちらを睨みつけているように、その花は咲いていた。その姿、ダルマにそっくり。座禅草は別名ダルマソウともいう。

可憐で清楚なミズバショウとは違い座禅草は堂々とした感じがする。

中国東北部、シベリア、樺太、北アメリカ、日本の北海道から本州の日本海側に分布。湿地や溪流のほとりに群生する多年草。草丈40cm位、葉は長楕円形。花序は4月に葉より先にでてくる。

仏炎苞は厚く、一方が開いた卵形で紫黒色だが、紫斑のあるものをウズラザゼンソウ、緑色のものをアオザゼンソウと言う。似ているものにミズバショウがある。

葉草部分は根茎。成分は精油などを含む。薬効は鎮吐、利尿作用をもっている。

他にアメリカザゼンソウはアメリカ北東部原産でスカンクキャベジとも言い、つぶすと悪臭を放つが民間薬として使用。乾燥した根茎を去痰、利尿、鎮痛、催吐薬として喘息や気管支炎にもちいられている。

星野富弘さんの「花の詩画集」の中に座禅草のことが書かれていた。昨年夏に富弘美術館を訪れたことを思いだしつつ、この詩画集に心ひかれる。

「サツカー 座禅草」という題で、

何がおきるか わからない

それがサツカー

私も手が使えない

一人の選手 (以下略)

このサツカーと手が使えないと座禅草の別名ダルマ草を連想しているのだろうか？

他にサトイモ科の植物のことも書いていて、

サトイモ科の植物―まむし草、座禅草といい水芭蕉とい人を驚かせるのが好きらしいと。

確かにサトイモ科のこれらの植物は他の植物の姿とは異なっている。林の中の湿地や溪流のほとりで、初めて出会うと、まず驚き、感動する植物である。

参考文献 「原色牧野和漢薬草大図鑑」北隆館
著者略歴 神戸薬科大学卒

ザゼンソウ (ダルマソウ) [ゼセンソウ属] (さといも科)
 (坐禅草) *Symplocarpus Foetidus* Nutt. forma
Latissimus Makino

花期は3月～5月
 仏炎包は普通濃いえび茶
 花序は楕円形で開くと
 濃黄色い花粉が目立つ

中田 芳子 画



どことなく気難しげな坐禅草	座禅草法主小坊主向き向きに	鳥の言 <small>こと</small> ききわけてをり座禅草	晚鐘や世世 <small>いの</small> 禱り継ぎ座禅草	雨粒に不意を打たれて座禅草	残雪に山彦あそぶ座禅草	見えそめて数 <small>あまた</small> 多見えだす座禅草	座禅草踏み見すれば世はしづか	峰の雪見あげてひらく座禅草	草に風明るく湧きぬ座禅草
塩出 眞一	品川 鈴子	武田 樵人	久保千鶴子	佐藤 和枝	沢田 緑生	藤木 俱子	藤田 湘子	福田甲子雄	小松崎爽青

ぐろっけ

鈴の奏

品川鈴子選

胎動を感じてからの冬籠 大阪 島本 知子

万札のくずせば失せる年の暮
カーナビは雪の峠を越せと言う
掃除夫は鼻歌まじり初仕事

初湯の乳児掌は「パー」おちよぼ口 兵庫 鈴木 愛子

高階に赤き玩具や出初式
母も逝き帰る家失せし歳の暮

冬畳母逝き残るベッド跡
緩やかに蘇堤白堤柳枯れ 大阪 角谷美恵子

帆を上げる黒塗リジャンク湖の冴え
ポケットにゴム製湯たんぽ切符切り

初売りの棚に予約の福袋
割烹着畳む間の無き松の内 愛知 市川十二代

ひとところ青空現るる窯初め
探偵の本を積み上げ冬籠る

爺ヶ岳の懐借りてスキーかな
煤逃げの父と子連れのビデオ店 兵庫 井上加世子

農機具の形そのまま雪つもる
年越しのそば食ぶ嫁の実家にて

門松の脇にも鱈干うばほされたる
冬至南瓜海を渡つて店頭 兵庫 上原口チエ

裏山に羚羊親子見える宿
バスの窓氷柱当りて破壊せり
雑木林灰燼の如山眠る

新年の外出先づは病院へ 兵庫 的場うめ子
書初は般若心経喜寿迎ふ

介護師の氷の様な手におびえ
新治療迷ひ迷ひし夜寒かな

連れ立ちて喋り手ばかり初雀 兵庫 藤井久仁子
マンションを見上ぐ燈台冬日向

云へぬこと白息に乗せ捨てさりぬ
大氷柱地球に刃向けてみし

灯点き吹雪の麓瞽女の宿 兵庫 北川 詠子
お正月絞りのリボン犬もつけ

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評

四句く十五句 加藤奈那 //

*選句は全て 品川鈴子

胎動を感じてからの冬籠

島本 知子

緩やかに蘇堤白堤柳枯れ

角谷美恵子

胎児が手や足で運動するのを、母親に感じられるのは妊娠第五カ月のころから。むしろ安定期かもしれないが、小さな命を実感しはじめ。母体に細心の注意を怠らず外出も控えめに、寒さを避けて家籠もり。ここから親子の情愛が深まるのでしよう。

高階に赤き玩具や出初式

鈴木 愛子

割烹着畳む間の無き松の内

市川十二代

正月の出初式には、消防署員や鳶職も出揃い、防火演習などをする。昔ながら梯子の曲乗りもあれば、近代的な消防活動に長梯子が天へ向かって伸びる。丁度高層マンションの窓辺で子守しながらの見物。玩具の赤がその部屋に散乱し、俯瞰すると地面には赤い消防車がまるでミニカーの様

中国の詩人では北宋の蘇東坡と中唐の白居易が双璧とされる。浙江省杭州は絶世の美女西施の故里で、その名に因んだ西湖には蘇堤・白堤が穏やかな風情を添えて、堤の柳がゆったりと揺れながら水面に葉を落とす。左の作品は昭和五七年俳人協会で訪中した折のもの。

日向ぼこ西施の湖に足垂れて

鈴子

澄む湖を漕ぐ生活の櫓遊ぶ

//

三が日の間の親戚、知友、近隣との年賀の交換、賀客の接待に始まり松の内まで、昔ながらの正月の行事を守っている格式ある家の様子が見える。真っ白い割烹着で甲斐甲斐しく切り盛りをしている主婦である作者、大変な中にも充実した雰囲気がつたわってくる。

農機具の形そのまゝ雪つもる

井上加世子

雪が降りしきっている。道も田畑も白一色の銀世界。畑中の耕耘機にはその形のままに雪が積もっている。雪の日の田園風景の一こまを写生した好感のもてる句である。

裏山に羚羊親子見える宿

上原口エエ

ホテルの窓から外を見ている。雪景色の裏山に雪のちらつくなか何かが動く、親子の羚羊だ。こちらに歩いてくる、映画を見てる感じだ。ふと窓のほうを伺っている羚羊と目が合った。云いようのない感動で胸が一杯になる。旅の幸せにしみじみとひたっている作者。

書初は般若心経喜寿迎ふ

的場うめ子

静かに墨を擦り背筋を伸ばし、一字ずつ心をこめて般若波羅密：と般若心経の書初、日々の諸々のこと病気のことなど忘れて無の世界に入っけてゆく、そしてあらためて自分が喜寿を迎える事を喜び感謝しているのである。書初、般若心経、喜寿と言葉の選択がよく格調高い句に心が洗われ

てゆく。

大氷柱地球に刃向けてあし

藤井久仁子

鈴子主宰に〈鎖樋筋金入りの氷柱なる〉がある。鎖樋にできた氷柱を筋金入りと詠まれた主宰ならではの氷柱の句、こちらは山を歩いていて出会った滝にできた大氷柱、刃のような形をしている氷柱が地球に刃を向けていると見た。発想豊かな句。

休講にはっと一息漱石忌

北川 詠子

先生の都合でいつも受けている講義が休みになった。楽しみながら気楽に学ぶことはなかなか難しく、幾つになってもついつい真剣になってしまう。作者の日頃の勉強に取り組む真面目さが「中七のほっと一息」で窺われる。勉強しているのは俳句、七部集、連句等がうかぶ。

一遍の墓塔に冬の雲動く

伊勢ただし

時宗（日本浄土教の一派）の開祖、鎌倉時代の念仏僧一遍上人の廟所のある神戸市の真光寺での句であろう。「冬の雲動く」に旅立ちから入滅までのおよそ十六年間を「すべてを捨て去ってゆくために」と、念仏を唱えながら諸国を歩き続けた一遍上人像に思いを深くしている。（以下略）